

(夜桜の下、仔犬を連れた奥さん 書き直し版)



夜桜が街灯に映えて綺麗な春のある宵、会社帰りに公園の脇の道で、子犬の散歩をしている斜め向かいの奥さんと出会いました。

「お仕事ですが？いつも遅いんですね。お疲れでしょう。ご苦労さま」と言うので、

「奥さんこそこんな時間に、毎日わんちゃんのお散歩ですか？大変ですねえ。どなたか他にご家族の方はなさらないんですか？」

と訊くと

「主人も子供もしないんで、しかたありませんわ。誰かがしないとこの子が可哀想ですから」と答えました。

「お優しいんですねえ」

と言うと

「本当は気分転換」と言った後で、

「うんう、本当はダイエットが目的ですよ！」

と幾分おどけた感じで答え、口元を緩めて笑いました。

自分は、家族に捨てられて独り者だという思いが心の片隅にあったせいか、ついつい

「お幸せそうでいいですねえ」

と羨む（うらやむ）と

「それでもないですわ。外見（そとみ）からはどう見えているか分かりませんけれど」

と少し陰のある口調になったので、自分は奥さんの今の穏やかな生活のあり方を肯定してあげるつもりで、その比較に今時の若い人を持ち出して、

「幸せと言えば、結婚式が頂点で、その後だんだん下がっていくより、結婚式はほどほどで、

その後、だんだん上がって行った方がいいですよね。今の若い人は、みんな結婚式に力を

入れすぎているような気がします」

と独り言の評論みたいに言ったのです。

すると、奥さんは、返答に困っているのか、暫く沈黙がつづいた後に、ふと見ると、薄暗い夜目にも、急に涙ぐんだ様子が感じられました。

自分は動揺しました。そうして気づかなかったことにしなくては、と咄嗟に思いました。それで、

「春とは言え、まだまだ寒いですから、散歩もそこそこになさって、お家に帰られた方がいいですよ」

と言ながら、何事もなかったように、何も気づかなかったように、幾分逃げるようにしてその場を立ち去りました。

それからひと月たった大型連休のある中日（なかび）に、突然奥さんのご一家は引越されました。連休中とて、会社に出ていた自分は、そのことを後日、ご近所の方との立ち話で知りました。

引越すという話も聞きませんでしたし、挨拶もありませんでした。

いつも散歩や会社帰りで合う度に世間話をする間柄だったのにと、少し裏切られたようなさみしさを感じましたが、同時にあのとき「本当は奥さんのご一家を壊そうとしたのではないか」という陰に潜んでねじ曲がった自分の「実際の意図」をにわかにかけて、恥ずかしくも恐ろしくもなり、

「やはり、自分はいい人間ではないな。家族も僕のそんなところを嫌ったのだろう」と、自分の本当の姿が悲しく、辛くなりました。

そうして、夜桜の下、奥さんがどんな気持ちで仔犬を連れて散歩をしていたのかを思うと、心の底から申し訳なさを感じ、深くお詫びをしたい気持ちになりました。